



セルフチェックで早期発見 ～乳がん検診をもっと身近に～



東京女子医科大学附属八千代医療センター
女性科 寺本穂波

乳がん検診について

自治体の検診では「視触診」「乳腺エコー」「マンモグラフィ」のいずれかで検査を行うのが一般的です。その結果、精密検査をすすめられることも少なくありません。そうした場合には婦人科ではなく、外科や乳腺科といった科で精密検査を受けましょう。がん以外の病気では線維腺腫^{*1}、のう胞^{*2}、乳腺症^{*3}といった診断がつくことがあります。また、マンモグラフィで「石灰化」といわれることもあるでしょう。あまりなじみのない言葉も多く、不安になられる方も多いと思います。わからずに漠然と心配することがないように、これらの中で本当に心配しなくてはいけないのはどのようなときなのかを解説いたします。

乳がんについて

女性の癌の中で罹患率^{*4}1位であり、好発年齢は40代後半とされています。いろいろなリスクファクター(危険因子)が指摘されていますが、それにあてはまるからといって必ずがんにかかってしまうわけではありません。大切なことは常に自己検診などを行い、さらに年一回は画像での乳がん検診を受けて早期発見をこころがけることです。自己検診をどのようなタイミングや頻度で行うか、どういうときに病院で検査が必要なのかを説明していきます。

がんと診断されてもきちんと治療と向き合うことが大切

乳がんの場合、基本的のがんの部分は手術で取り除くことになります。ですが、昔とちがって現在は、乳房を全部とってしまう「乳房切除術」よりは部分切除ですむ「乳房温存術」が主流です。化学療法(抗がん剤の治療)や、放射線治療を併用することもあります。早期発見で乳がんが小さければそれだけ温存術ができる可能性は高くなります。そのためにも早期発見、自己検診は重要なのです。また、残念ながら乳房全体をとらなくてはならなくなっても、「乳房再建」と呼ばれる手術でもう一度乳房を作り直す手術があります。自分の背中やお腹の筋肉を使って乳房を作ったり、バッグを入れて形を整える場合もあります。これらの技術は形成外科の先生方が担当されます。現在はこれらの方法も昔に比べ格段に進歩しています。たとえ乳がんと診断されても悲観せず、前向きに治療と向き合ってくださいと思っています。

※1 若年の女性に起こりやすい良性のしこり(腫瘍)。 ※2 腎臓・肝臓・脾臓などに発生する、中に液体のたまった空洞。 ※3 乳腺が長年にわたって、卵巣ホルモンの影響下に増殖と萎縮(いしゅく)を繰り返している間に、乳腺内に増殖をしている部分と萎縮、線維化している部分が混在するようになり、大小さまざまな硬結を触れるようになったもの。
※4 一定期間に発生した特定の疾病の新患者数の、その疾病にかかる危険にさらされた人口に対する比率。

